

◎施設に関する事項

■加古大池
かこおおいけ

一六六〇年代（江戸時代）に加古新村の開拓とあわせて築かれた北池、南大池、跡池、中池、五軒屋池の五つのため池が一つに統合され、現在は加古大池と呼ばれています。

開発当初は隣の地区にある風呂ノ谷池の余り水を水源としていましたが、新田の開発が進み用水不足を起こすようになり、草谷川を水源とする大溝用水の開削（二六八〇年）や河原田井堰の余水の利用（二七一〇年）がなされるようになりまし
た。

一八九一
（明治二十四）
年の淡河川疏
水完成ととも
に、練部屋か
ら加古支線を
通じて分水を
受けることと



現在の加古大池

なり、安定した水源を確保できるようになりました。

その後、ため池の老朽化が進み、一九四一（昭和十六）年に五つのため池を統合する大改修を始め、一九四九（昭和二十四）年に完成し、兵庫県内でもっとも大きな規模のため池となりました。

続いて、一九八八（昭和六十三）年から二〇〇〇（平成十二）年にかけて、堤体や取水施設の改修工事とともに、大雨の時に洪水を一時的に加古大池に貯水する機能を持たせる工事を行いました。この工事では、加古大池をめぐらとするツバメなどの野鳥を保護するため、アシ原を残したり、止まり木を設けるなど、自然環境に配慮した整備も行っています。その他、みんなで楽しめるため池にするために遊歩道や広場、水遊びのできる施設などを造成しました。今では、たくさんの方が訪れる地域のいこいの場となっています。

加古大池

- 面積：49ヘクタール（甲子園球場の12倍）
- 周囲：3キロメートル
- 貯水量：130万トン（学校のプールおよそ6500杯分）
- 加古大池の水で稲を育てている水田面積：295ヘクタール



ウィンドサーフィンを楽しむ人々（加古大池）

御坂サイフォン

みさか

淡河川疏水の最大の難関は、疏水が幅七百メートルを越える志染川（淡河川と山田川が合流した川の名前）の溪谷を渡ることでした。これを解決する工法として、農業水利施設として日本初の鉄管による噴水工（サイフォン工）が用いられました。

神戸市北区淡河町木津の取水口から始まる疏水は、淡河川の右岸の丘陵地に入り、御坂の北側の丘まで来ると、直径約九十センチの鉄管につながります。吸い込まれた用水は、志染川にかかる「めがね橋」まで管内を一気に下り、橋を渡ると対岸に設置された管の中を丘の上まで駆け上が

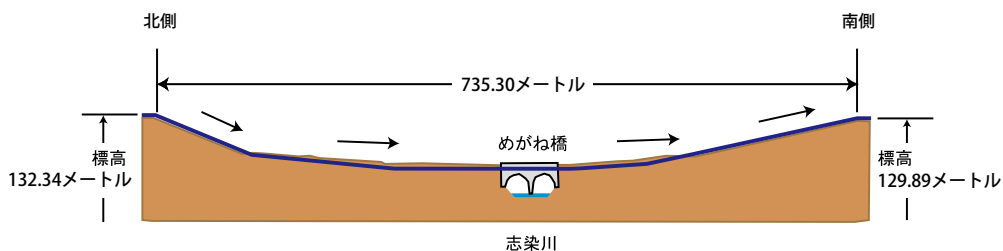


現在の御坂サイフォン

り、南側の丘の頂で噴出します。原理としては単純な仕組みですが、巨大な鉄管を用いた工法は当時例のない新技術でした。

用いられた鉄管は、一般的に使われていた銑鉄製ではなく、強度や軽量性に優れた錬鉄（マイルドスチール）製を使用しました。事業を監督したパーマーは、イギリスに直径の異なる三種類（約八十一センチ、八十六センチ、九十一センチ）の錬鉄管を発注しています。これは船や馬車で輸送する時、三本を一組として入れ子にして、安く大量に運べるよう工夫をしたものでした。

この初代の鉄管は老朽化により廃止され、二代目の鉄管が一九五三（昭和二十八）年に、三代目の現在の鉄管は一九九一（平成三）年に設置されたものです。

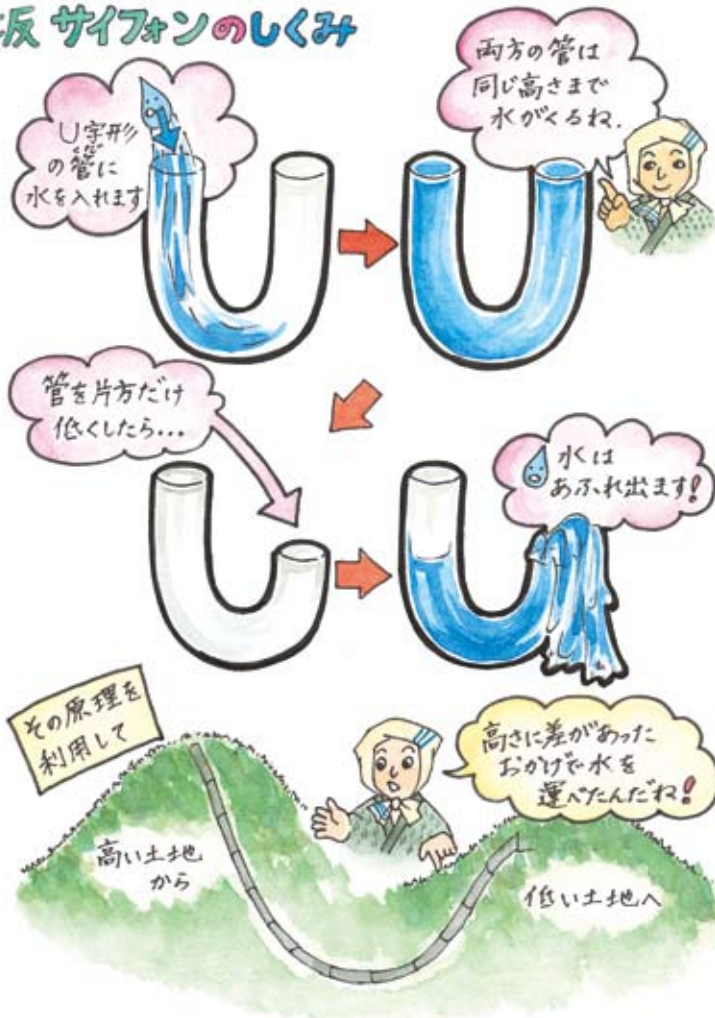




めがね橋（上流より）

めがね橋は、志染川の上に鉄管を渡すためにかけられました。この橋は、近くで切り出された砂岩で出来ており、今でも一八九一（明治二十四）年に造られた当初の姿を留めています。二代目の鉄管を設置する工事の際、もとのめがね橋に沿って下流側に新しいめがね橋が鉄筋コンクリー

御坂サイフォンのしくみ



ト製で造られ、その中に鉄管が通されました。したがってめがね橋は、志染川の上流側からと下流側からと見る場所によりおもむきが異なります。なお、三代目の鉄管は、めがね橋のところでは、二代目の鉄管の内側に通されています。

練部屋分水所

練部屋分水所は水源の淡河川と山田川から練部屋（神戸市西区神出町紫合）に導かれた水を、下流の六つの地域（加古、天満、蛸草、森安、手中、印南）に分ける施設として、一八九一（明治二十四）年に造られました。

当初はレンガ造りの四角形でしたが、完成の翌年に発生した大雨の被害を受け、六角形に造り直しました。現在のもは直径十メートルの鉄筋コンクリート造りで、一九五九（昭和三十四）年に円筒分水工といわれる工法で造られたものです。配水口は統合されて、現在は四つとなっています。

分水所の構造は、いずれも上流から届いた水を、いったん分水工の下部にもぐらせて、分水工の中央部から吹き上げ、流れと水位を安定させて水を分ける構造になっています。

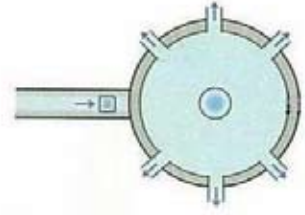
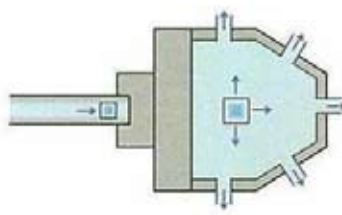
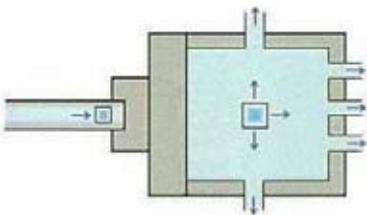


練部屋分水工の変化（模式図）

1891（明治24）年
矩形分水工（平面図）

1893（明治26）年
六角形分水工（平面図）

1959（昭和34）年
円筒管分水工（平面図）



（参考資料：いなみ野台地を潤す水の路“淡河川山田川疏水”）

分水工のしくみ

